

家庭における食事の用意をめぐる意味づけ

——質的調査からみる育児期就業女性の対処戦略と階層化——

藤田結子*・額賀美紗子**

本稿は、女性の社会進出と女性の階層化が同時に進む中、育児期に就業する女性は、食事に関わる家事が自分に偏る状況をどう意味づけているのか、「手作り規範」に注目して考察することを目的とする。リサーチクエストンとして、(1)「育児期に就業している女性は、食事の用意にどのような役割を見出しているのか」、(2)「手作り規範への態度は、就業形態、職業、学歴、世帯収入によって女性の間でどのような差異がみられるのか」を設定し、インタビューと参与観察、および写真撮影を調査方法に採用し、データを分析した。

調査の結果、第1の問いに関して、本調査の女性たちは「子ども中心主義」から食事の用意に母親役割を見出していることが明らかになった。第2の問いに関しては、就業形態や職業との関わりがみられた。つまり、母親役割の延長として働く非正規女性は「手作り＝愛情」に肯定的な傾向がある一方で、正規フルタイムや準専門職の女性に手作り規範を批判的に捉える事例が複数みられた。また、世帯収入が高い者はサービスや商品を購入して時間を節約するなど、世帯収入によって対処戦略に異なるパターンがみられた。要するに、手作り規範の相対化にも、その対処戦略にも階層差が見出されたのである。

女性活躍推進と女性の階層化によって、階層の高いキャリア女性の間では手作り規範が弱まっても、非正規雇用やひとり親の女性は負担が重いまともなる可能性が示唆された。

キーワード：食事、性別分業、手作り規範

1 はじめに

2010年代以降、新自由主義的な女性活躍推進の流れの中、育児期の女性への両立支援が進められるようになった。第1子出産前後の女性の就業状態をみると、妊娠前の就業率が7割超で推移する中、出産退職する女性が減少した。第1子出産前後の就業継続者の割合は、4割程度で推移していたが2010～14年は53.1%へと上

* 明治大学商学部・教授 yfujita@meiji.ac.jp

** 東京大学大学院教育学研究科・准教授 nukaga@p.u-tokyo.ac.jp

昇した（国立社会保障・人口問題研究所 2017: 54）。だが他の先進国と比較すると、家事時間は女性に大きく偏っている（内閣府 2020: 47）。とくに「食事の管理」に関しては、日本は女性が非常に時間をかけている国である（品田 2007）。

女性側の意識に注目すると、女性は「男は仕事、女は家事育児」という「性による役割振り分け」を否定しても、「愛による再生産」を肯定する傾向がある、と大和礼子（1995）が指摘している。この「愛による再生産」と食事に関連して、女性が愛情を込めて手作りすることで家族は情緒的に結びつきを強めるといった根強い「手作り＝愛情」意識（江原 1988; 山尾 2003; 福島 2020）や「手作り規範」（村瀬 2020）の存在が指摘されている。

そこで本稿は、女性の社会進出が進んでも圧倒的に女性が食事を手作りしている現状において、育児期に就業する女性がどのように食事の用意を意味づけているのか、そして女性の階層化が進んでいることから就業形態、職業、学歴、世帯収入によって女性の間でどのような差異がみられるのか、質的調査を用いて考察することを目的とする。

2 先行研究のレビュー

2.1 食事作りに関わる負担と女性の抑圧

欧米では 1980 年代に、女性の社会進出からジェンダーや家族の分野で家庭の食事に関する研究が増え始めた（Charles and Kerr 1988: 1）。「古典」とされる Marjorie L. DeVault（1991）の著書 *Feeding the Family* では 30 名の女性にインタビューが行われた。家事研究で食事は「料理」「食材の調達」などが分析対象であったが、実際には、家族が嫌がらず食べてくれる献立を考えるとといった頭の中で行う複雑な作業が欠かせない（DeVault 1991）。これは目に見えないため家族にも本人にも認識されない。重いケア労働の分担は話し合われず女性の「愛情」表現だと受け止められる（DeVault 1991: 55, 162; 平山 2017: 37-8）。

また、女性たちには、食事の際に夫の好みを優先しさまざまな要求を満たそうと努める傾向がみられ、これによって女性のアイデンティティや従属的立場が維持されていた（Charles and Kerr 1988: 64; DeVault 1991: 146, 161）。日常的な食事の用意を通してジェンダーをすること（doing gender）や、それを本人も家族も当然視することは、女性の抑圧を促す（DeVault 1991: 106, 117）。さらに、食事の用意には階層差もみられた。階層の高い女性にとって、食事は家族や友人とともに経験する楽しみでもあり、料理を自己表現とみなす傾向があった。他方、貧困層の女性は収入や時間が不足しがちであり、調理や食事は厳しい毎日を生き抜くためにしなければならないことであった。女性たちは階層によって異なる経験をしていたのである（DeVault 1991: 201, 210）。

2000 年代以降になると、食事の用意にかかる時間の変化が報告された。米国では女性が料理にかかる時間に関して、1965 年には 1 日 113 分であったが 90 年代半

ばには 65 分まで減少し 2008 年も同程度であった (Smith et al. 2013). 北欧諸国でも同様に時間の減少がみられた (Holm et al. 2016). だが時間が短くなっても、食事の責任は女性にあること自体には変わりがない。そこで、Brenda Beagan (2008) らは、女性の社会進出が進んでもなぜ食事に関わる家事が女性に偏るのか、カナダの家族にインタビューしその意味づけを検討した。その結果、妻自身・夫・子は食事の用意を女性の役割とみなしていたわけではなかった。欧米社会が男女平等に敏感になる中で、よりジェンダー中立的な意味づけ——自分／妻／母親は「時間的余裕がある」「健康意識が高い」「要求水準が高い」「家事スキルが高い」といった個人の状況に関連づけられ、性別とは関係ないという解釈がなされていた。伝統的な性別役割への期待は、直接表明されるのではなく個人の選択やスキルなどの言葉が選び取られるというように、より巧妙に維持されている状況が明らかになった (Beagan et al. 2008).

2.2 日本における「手作り規範」

以上に欧米の先行研究をみてきたが、品田知美 (2007: 88) が食事の用意にかかる時間の国際比較をしている。イギリス・オランダ・日本の労働時間配分を 2000 年、2001 年の調査を用いて分析した結果、1 日に「食事の管理」にかかる平均時間については、日本の女性は 151 分であり、イギリス・オランダの女性より 1 時間ほど長いことがわかった。品田は、日本は女性が「食事の管理」に非常に時間をかけている国であると指摘している。

この欧米との違いに関して、Anne Allison (1991) が「お弁当」に注目し重要な指摘をしている。Allison によれば、日本の幼稚園に子どもが日々持参する手の込んだ弁当は、欧米にはみられない文化である。数々の小さなおかずには飾り付けがされた弁当作りは時間と労力がかかる。そして幼稚園の教諭らは子どもが持参する弁当の中身や子どもの食べ方を日々チェックし、女性たちが母親役割をきちんと遂行しているかを評価する。また、女性たちはそれを通して母親としてのアイデンティティや喜びを抱くようになる。幼稚園は国家のイデオロギー装置として、性別分業を実践するよう促しているという。

このような「手作り規範」の広まりに関しては、歴史的手法を用いた研究によって明らかにされてきた。明治期中の上流階層の家庭では、食物を扱うことは「卑しい」とする意識があり、家事使用人が食事を作ることが多かった (村瀬 2009: 82)。その一方で、庶民は妻も農作業で働かなければならず、姑が調理を担当し嫁は田畑の仕事をする事例がみられるなど (矢野 2007: 94)、地域や階層によって食事の用意を担う女性は異なっていた。小山静子 (1999: 161) によれば、家庭で何を食べるかということに関心が払われるようになったのは歴史的にみれば比較的新しいことである。大正期、国家による生活改善運動の中で栄養に配慮した食事の準備が求められ、とくに新中間階級の主婦にあるべき「家庭料理」が受け入れられていった。専業主婦が大衆化した高度成長期、テレビは家庭における「手作り規範」が広く浸

透するうえで重要な役割を果たした。江原由美子（1988: 164）は、1970年代にNHK「きょうの料理」で主婦の手作り料理の価値が強調されるようになったのは、当人びとが外食や加工食品などの商品に依存し始めたからだと指摘している。80～90年代には働く女性を応援する「時短料理」がメディアで人気を獲得し、食の外部化よりも家庭での手作りを後押しした（福島 2020: 84）。

また、1985年に厚生省公衆衛生審議会によって「健康作りのための食生活指針」が提唱され、「1日30食品」が目標に掲げられた（山尾 2003: 150）。2005年には食育基本法が制定され食育運動が推進された。さらに、1980～90年代の栄養学においては、調理済食品の利用や外食は栄養バランスを崩すものとして健康リスクと関連づけられ、働く女性の負担については触れられなかったという（福島 2020: 84）。

2.3 女性間の差異

このように国家やメディア、教育機関を介して広まった手作り規範は、調理済食品を使う人の割合が増加した今日でも、女性たちに食の外部化に対する抵抗感を抱かせている。1990年代に実施された調査では、日常的な調理の外部化に最も抵抗感を抱くのは、専業主婦よりも共働き世帯、とくにパートの妻である傾向が示された。妻パート世帯では、妻は家事全般の外部化に抵抗感は少なかったが、日常的な調理の外部化に関しては抵抗感を示していた（堀内ほか 1997）。また、抵抗感が比較的少なかったという専業主婦について、実際には、共働き世帯よりも食卓に出す品数が多い傾向が指摘されている（伊藤純・伊藤セツ 1996）。最近では、就業継続する女性が増える中、「夕食を作る回数」に関して、就業女性の方が非就業女性に比べ少なく、就業女性の中でもフルタイムで働く者はパートタイムで働く者よりも少ないという傾向が明らかにされている（石田ほか 2015）。

これらの就業形態に関する知見をまとめると、正規フルタイムで働く女性は食事の外部化への抵抗感がより少ないが、非正規パートで働く女性は外部化を避ける傾向があるといえるだろう。

これに関連して、松信ひろみ（2000）の研究は、職業と手作りについて次の点を明らかにしている。松信の調査において、「離乳食やお弁当を手作りせず市販品を与える母親は愛情が足りない」と「忙しければ、離乳食やお弁当を市販品などにすることはかまわない」のどちらにより近いか回答者に尋ねた結果、高度なスキルや職業中心の生活が求められる「専門職」と一般職や非正規が多い「事務販売職」では、ほぼ半々であった。他方、看護師や保育士などの「準専門職」は後者を選択する割合が6割となり、職業によって異なる傾向がみられた。松信は、「専門職」は仕事と子育ての両立が難しいが、「準専門職」は比較的再就職も両立もしやすい職場環境で働いており、この点が影響しているのではないかと論じている（松信 2000: 165）。よって、職業も手作りへの態度に影響するといえるだろう。

さらに、中西祐子（2018）による研究は、世帯収入が高いほど、母親が専業主婦

であるほど、高卒以下ではないほど、性別役割分業を肯定するほど、その母親は有
意に「子どもの食べるものの食材や産地に注意」する傾向を明らかにしている。

以上の点をまとめると、日本は欧米と比べて女性が食事の用意にかかる時間が長
く、分担も偏っている。これに関わる手作り規範は女性に妻や母親としての役割を
遂行させるためのイデオロギーであり、女性の社会進出が進んでも、女性たちは食
の外部化に抵抗感を抱いている。そのような意識は女性の間で差異があり、就業形
態、職業、学歴、世帯収入によって異なることが示唆されている。

2.4 リサーチクエスション

以上にみてきたように、日本では欧米と比べて労力や時間がかかる手作り規範の
存在が指摘されてきた。このような意識が、女性が食事の用意にかかる時間が長く、
女性の負担が重い要因の1つだと推測される。しかし、日本においては、実際に当
事者がどう意味づけて食事の用意をしているのかについては十分に明らかにされて
こなかった。そこで本稿はこの意味づけに焦点を当てて明らかにしようと試みる。

とくに日本の場合、女性が食事の用意をするうえで、欧米の先行研究が指摘した
夫の要求よりも、子どもとの関係が重視されると推測される。Allison (1991) は
お弁当作りと母親役割の結びつきを指摘した。実際に、野田潤 (2015) による調査
では、「弁当作りを通じて愛情を伝えたいか」という質問に対して、未就学児また
は小学生の弁当を毎日作る女性ほど肯定する割合が高く、「弁当＝愛情」意識が強
いことが示された。他方、夫の弁当を毎日作る女性は弁当と愛情との関係を否定す
る傾向が強かった。要するに、弁当作りに関しては、妻役割よりも母親役割を重視
する傾向が示された。また、先述の Began et al. (2008) の研究では、食事に関わ
る不平等な分担に関して、性別分業ではなく、個人の状況やスキルといったよりジ
ェンダー中立的な語が選ばれ意味づけられていることがわかった。そこで本調査で
は、弁当という外に持ち出す食事の知見を踏まえ、家庭内での食事に関して誰のた
めにどのような役割を果たそうと意味づけているのかを検討する。

また、先行研究では、就業形態では非正規パートの方が正規フルタイムより外部
化への抵抗感が強く、職業では「専門職」「事務販売職」の方が「準専門職」より
外部化・簡易化に否定的という傾向がみられた。松信 (2000) は、「準専門職」女
性にみられる意識の傾向は両立可能な職場環境によるものと解釈しているが、当
事者の意味づけは十分明らかにされていない。

以上の点を踏まえ、本研究では、育児期に就業継続する女性について、食事の用
意をめぐる意味づけを、とくに就業形態、職業、学歴、世帯収入との関わりに注目
しながら考察する。リサーチクエスションとして、「育児期に就業している女性は、
食事の用意にどのような役割を見出しているのか」「手作り規範への態度は、就業
形態、職業、学歴、世帯収入によって女性の間でどのような差異がみられるのか」
を設定し、質的調査を用いて考察することを目的とする。

3 調査方法

本調査は、2016年に開始した仕事と家事育児に関わる研究プロジェクトに参加した55名（高卒・専門卒・短大卒・大卒・大学院卒を含む）から、あらたに協力者を募り、2018～2020年に行われた。55名は首都圏の5地域を主な調査地とし、保育園を拠点に未就学児が少なくとも1人いる女性に協力を依頼し、雪だるま方式で集めた。各人に調査目的とデータ利用の仕方、個人情報保護について説明し同意を得た。この女性たちの中から、就業形態、職業、学歴、世帯収入が異なるタイプの人びとが複数含まれるように「理論的サンプリング」（佐藤 2006）を実施した。順に声をかけ、後述する食事記録と聞き取りを16名に依頼した。さらに、専業主婦4名にも協力を依頼した。計20名からデータを収集し分析した時点で、リサーチクエストンに関わる一定の知見が得られたと判断し、最終的に20名を中心とする分析とした。

このうち2名は夫が単身赴任中、2名はひとり親世帯である。4名ともフルタイムで働いている。本調査では、DeVault（1991）の調査と同様、これらの母親のみの世帯も含めた。なぜなら、手作り規範をめぐる女性間の差異を明らかにするという2番目の問いに関して、世帯の差異を含めて考察することができ、意義があると考えたからである。

20名の協力者に関して、個人が特定されない範囲でその概要を表1に示す。食事の用意に関わるインタビューをした時点では、20名の女性のうち正規（フルタイムまたは時短）が11名、非正規パートが5名、専業主婦が4名であった。学歴に関しては、高卒が4名、専門卒が5名、短大卒が1名、大卒が10名である。

本調査は調査協力者の数よりも、個々の事例の「厚い記述（thick description）」を重視した質的調査である。インタビューは協力者の自宅か、自宅近辺の店や公共施設あるいは職場で、各人2～5回実施した。インタビュー・ガイドを用いて1～3時間にわたって質問をした。また、働く理由、家事育児の状況、夫の仕事や分担、生い立ちについて数十項目にわたる質問をした。さらに、住居や食事の様子、家や外での遊び、保育園、職場等、日常生活の観察をした。また、各人に1週間の朝夕の食卓の状況（1名につき14食、計280食分）を撮影してもらい、後で一緒に写真を見ながら食事の用意や献立、買い物に関する質問を行った。

また、本調査は2名の調査者によって行われた「チーム・エスノグラフィー」（Erickson and Stull 1997）である。調査者も子どもが保育園に通う親という点でインフォーマントと同じであり、「ネイティブ・エスノグラフィー」（Jones 1970; 照山 2013）とよばれる調査法だともいえる。この手法は長所も短所も指摘されているが¹⁾、インフォーマントの自宅に入れてもらいやすく、日常生活の観察がしやすく、家族や子育て、人間関係に関わる話がしやすいなど、今回は利点が多かった。

また、分析ではグラウンデッド・セオリー・アプローチの基本的発想を応用する

表1 インフォーマントの属性と意識

仮名	年齢	職業	世帯	雇用形態	学歴	子の年齢	食事の用意で重視する人	自分が食事の用意をする意味づけ	手作り=愛情
A	40代	医療専門職	夫妻同居	正規	大卒	1,6	自分	母親役割	肯定的
B	30代	看護師	夫妻同居	正規	大卒	3,5	子ども	家事スキルの高さ	否定的
C	40代	会社員	夫妻同居	正規	大卒	1,1,10	子ども, 夫	母親役割	肯定的
D	30代	会社員	夫妻同居	正規	短大卒	2	子ども	母親役割	肯定的
E	40代	服飾技術者	夫妻同居	正規	専門卒	5,5	子ども	食への関心の高さ	否定的
F	20代	看護師	夫妻同居	正規	専門卒	0,3	子ども, 夫	家事スキルの高さ	否定的
G	30代	会社員	夫妻同居	正規	高卒	2	自分, 夫	家事スキルの高さ	否定的
H	30代	フリーランス	夫妻同居	非正規	大卒	1,3	子ども, 自分	母親役割	肯定的
I	30代	社会福祉士	夫妻同居	非正規	専門卒	3,5	自分, 夫	母親役割	否定的
J	30代	NPO 職員	夫妻同居	非正規	専門卒	4,6	子ども	母親役割	肯定的
K	30代	施設職員	夫妻同居	非正規	高卒	1	子ども	母親役割	肯定的
L	40代	派遣社員	夫妻同居	非正規	高卒	5	子ども	家事スキルの高さ	肯定的
M	40代	専業主婦	夫妻同居	NA	大卒	5,10	子ども	母親役割	肯定的
N	40代	専業主婦	夫妻同居	NA	大卒	5	子ども	家庭責任	肯定的
O	30代	専業主婦	夫妻同居	NA	大卒	3,6	子ども, 夫	家庭責任	肯定的
P	30代	専業主婦	夫妻同居	NA	大卒	6,12	子ども	家庭責任	肯定的
Q	40代	会社員	夫単身赴任	正規	大卒	5	NA	NA	肯定的
R	30代	会社員	夫単身赴任	正規	大卒	2,6	NA	NA	否定的
S	30代	会社員	ひとり親	正規	専門卒	1	NA	NA	否定的
T	30代	会社員	ひとり親	正規	高卒	6	NA	NA	肯定的

婦納的コーディング (佐藤 2006) の方法を採用した²⁾。はじめにオープン・コーディングを行い、次に、その結果に基づきより焦点化したコーディング (例「手作り規範の重視」「子ども中心の献立」など) を行い、食事の用意に関わる約 40 の主要なパターンやカテゴリーを抽出した。その際、MAXQDA を使用した。それらをもとにサーチャクエスションを立て、データに根ざした分析を行った。

4 調査結果

まず誰が食事の用意をするのかに関して、20 名のうち夫と同居する 16 名を対象

に、調査票と聞き取りデータから分析したところ、(1) 夫はまったく料理をしない(12名)、(2) 夫は月に数回料理をするが、平日は料理をしない(2名)、(3) 夫は平日に数回料理をする(2名)の3パターンに分かれた。夫が平日に夕食の用意をすると答えた者は1名のみであった。先行研究と同様、本調査でも食事の用意は女性に偏っている状況がわかった。この状況の中、女性たちがどのような意味づけをして食事の用意を引き受けているのか以下に考察していく。

4.1 誰のために食事を作るのか

4.1.1 食事における「子ども中心主義」

誰を最も重視して献立を決めたり料理をしたりしているのかについて、夫妻同居の16名を対象にその語りを分析した。その結果、「子ども」が9名、「子どもと夫」が3名、「自分と夫」が2名、「子どもと自分」が1名、「自分」が1名であった(表1)。欧米の先行研究では女性たちが夫の要求を満たそうと努力する傾向が指摘されていたが、本調査の女性たちの意識は主に子どもに向けられていた。

その語りの内容を例示すると、正社員Dさんの場合、時短勤務をして2歳の子を育てている。夫は家事育児をほとんどせず不満は大きいという。それでも食事と愛情は「すごい関係してる」といい、次のように、子どもに合わせた食事を丁寧に作っていると語った。

(子どもは)キノコとかも嫌いなんですけど、体にいいので刻んでばれないようにしてハンバーグに入れたりとか、炊き込みご飯にしたりとか、お魚もばれないようにしてますね。そうすると食べるので(大人も子どもも)全部うちにご飯一緒です。

会社員の夫からの要求はとくになく、カレーも子ども用の味付けで作っているという。

「子ども」「夫」の両方に言及した者の例をあげると、Kさんはパートで児童福祉の仕事をしてながら1歳の子どもを育てている。食事の用意で誰を重視するかについて、「子どもの健康がやっぱり一番ですよ。パパももちろんですけど、やっぱり子どもベース」と、夫にも言及したが子どもの方を優先すると話した。また料理に関して、「子どもができてからは、女でいるというよりかはもう母だになって」「こんだけ自分が子どもにかけてる時間だったり食材だったりを考えれば愛情の1つ」といい、母親の愛情表現だと話した。

これらの話のように、子どもを重視して食事の内容を考えるという話が繰り返し聞かれた。そうであっても、夫の要求や期待をまったく意識していないわけではない。まず、夫を重視していると語った女性は、上記のKさんを含め16名中5名いた。小学生と幼児を育てる会社員のCさんが、「夫はハンバーグが食べたいとかいいます」「品数少ないと怒られそうで、少ないと、(夫は)物足りない顔をする」

と話したように、食事の内容が夫婦関係に影響する様子も聞かれた。

つぎに、朝・夕食時の状況（食卓の写真と聞き取りデータ）を分析したところ、夫と同居している女性は、夫が単身赴任している女性やひとり親の女性と比べて、献立の品数がより多く、調理済食品（惣菜、レトルト、冷凍食品）の割合がより少なかった。したがって、女性たちは、食事の用意は子ども中心だと語っていても、夫に合わせた食事も頭の中で考えて作っているといえる。この点については、Hさんの話に表れている。

パパが夜、うちで食べずに外食をしてくれるみたいな感じだったとしたら、すぐ私は楽になるなっていうのはあります。……毎日もう大変だから。うちでは作らないってなったら、（夫は）「それはちょっと」ってなると思います。

Hさんは、フリーランスでIT関連の仕事をしながら2人の幼児を育てており、料理は「母として最低限しなきゃいけない」ことだと話した。夫婦関係は良好であるが、夜遅く帰ってくる会社員の夫に食事を用意しておくことが面倒だという。彼女の意識の上では、食事の用意は子どものためであり、夫の重要度は低い。そうであっても、食事に関する要望を「何もいわない」という夫が帰ってくる家庭の食卓上に、ほぼ毎日主菜・副菜・汁物を作って出していた。

以上のように、本調査では、夫と同居する女性に、夫に合った献立を考えつつも、子どもを中心に食事の用意をする傾向がみられた。この点において就業形態、職業、学歴、世帯収入や次に検討するジェンダー意識による違いはなかった。子どもを生活の中心に据える考え方は「子ども中心主義」とよばれ、子どもの意思や行動を家族の最大の関心事とする近代家族の特徴であることが指摘されている。欧米がカップル中心主義であるのに対して、子ども中心主義は極めて日本的なイデオロギーであり、母親規範と密接な関係をもつ。吉田直哉によればそれは「子育てを行う母親が育児専従の生活を送る上で価値のある崇高な動機」となり、『献身』と『自己犠牲』を奨励する母性イデオロギーを強化する形で、女性を『母親役割』へと促した」という（吉田編 2018: 26）。欧米の先行研究では夫がさまざまな要求をし、それが夫婦関係に影響する傾向がみられたが（Charles and Kerr 1988; DeVault 1991）、本調査では子どもの好みや健康、食べやすさが重視されており、食事の用意にも「子ども中心主義」がみられたのである。

4.1.2 責任の意味づけ

このように女性たちには子どもを中心に考えて食事の用意をする傾向がみられたのだが、その責任が圧倒的に自分に偏る状況をどう意味づけているのだろうか。夫と同居する女性16名は、自分が食事の用意を引き受けている理由を1つかそれ以上述べた。そのうち主な理由とみなされていた点を分析したところ、「母として」「お母さんになったから」など、明確に「母」に関する語を使って、自分が食事を用意する責任について語った者が8名いた。先に例示したように、施設職員Kさ

んは「母の愛情表現」といい、フリーランスで働くHさんは「健康面だけでなく、母として何かしなきゃ、そこは最低限しなきゃいけない」と語っていた。

さらに例をあげると、NPOでパートをするJさんは2人の子どもを育てている。公務員の夫は仕事が多忙で不在のことが多い。Jさんが家事をほぼ全部引き受けているが不満はなく、「母としてできるだけ自分で作って、ちゃんと愛情込めて作ってあげたいっていうこだわりがあって」と語った。もう一例あげると、専業主婦のMさんは、以前はデザインの仕事をしていたが、夫が転勤族で出産後に退職した。Mさんは小学生と幼児を育てており、食事の用意について、「やらなくていいんだったらやりたくないんですけど、義務感というか、お母さんになったからにはやらなきゃって」と話した。

また、都心に暮らす専業主婦のNさんとOさんの2名は、「母」という語を使うことはなかったが、「自分の仕事なくなるから（夫は）やらなくていい」などと話した。専業主婦のPさんは、夫は夜勤があり食事の用意は自分がしていると話した。彼女たちは、夫が稼ぐ一方で、自分に家庭責任があるとみなしていた。

そして、先述のBeagan et al. (2008)の研究にみられた「家事スキルが高い方が料理をする方がめ事が減る」という理由をあげた者が4名いた。たとえば看護師のFさんは、2人の幼児を育てながら正規フルタイムで働いていて、家事育児をほほしない夫への不満は大きいという。それでも自分が食事の用意をする理由として、「(夫に) 変なものを作られたりとか、変にキッチン荒らされるよりは、自分で作って片付けた方が楽」と話した。

さらに、「食への関心の高さ」を理由とした者が1名いた。服飾技術者Eさんはキャリア志向で、会社員の夫も家事育児を分担している。食事作りに限っては、「私が台所で料理をするのが好きだって（夫は）わかっているから譲ってくれてるところもあるのかな」というように、Eさんの方が食への関心が高いことから食事作りを担当していると語った。

上記の意味づけは、「母親役割」（正規3名、非正規4名、専業主婦1名）と「家庭責任」（専業主婦3名）といった性別分業に基づく意味づけと、「家事スキルの高さ」（正規3名、非正規1名）、「食への関心の高さ」（正規1名）といったジェンダー中立的な意味づけにわけられ、後者の意味づけをするのは主に正規雇用の女性であった。

以上の結果をまとめると、女性に偏る食事の分担に関して、Beagan et al. (2008)の研究では個人の状況や性格に基づくジェンダー中立的な理由づけが多くなされていた。本調査では母親の役割に基づく意味づけが最も頻繁に聞かれたが、正規雇用で働く女性にジェンダー中立的な意味づけをする事例が複数みられた。

4.2 手作り規範

4.2.1 就業形態・職業による差

つきに、手作り規範について検討する。手作りと愛情の結びつきに対する態度に

関しては、単身赴任・ひとり親世帯を含めた20名を対象に分析を行った。そのうち、「手作り＝愛情」という考え方に肯定的な者は13名、否定的な者は7名であった。就業形態、職業、学歴、世帯収入のうち、就業形態、職業に顕著なパターンが見出された。就業形態に関して、「手作り＝愛情」に肯定的な者13名の内訳は、非正規パートが4名、専業主婦が4名、正規が5名であった。否定的な者7名のうち正規が6名、非正規が1名であり、後者には正規で働く者が多い(表1)。

「手作り＝愛情」に肯定的な例をあげると、食事の用意を「母親役割」だと話したJさんは、NPOでパート勤務をするかたわら、時間を作って自然食について学んでいる。「最初から煮たり、豆乳も豆から搾るぐらいのことをやって」というように、子どもの健康や食育のために惣菜やレトルトは一切使用せず手作りにこだわっていると話した。

「手作り＝愛情」を肯定する女性のうち、Jさん以外は、調理済食品や外食を利用するけれどもなるべく手作りの方がよいと考えるパターンであった。彼女たちはとくに冷凍食品を頻繁に利用し、加熱調理して皿に載せていた。だが、平日の弁当や惣菜の利用に関しては、否定的な意見が繰り返し聞かれた。たとえば会社員Cさんは、次のように説明した。

週末はいいって思ってるんですけど、平日の夜にマクドナルド出すとか、お弁当だけとかはあんまりたくないです。よく映画とかテレビで、荒れてる家庭というか、子どもにあんまりよくないっていうイメージがついてるんです。

このような家族の情緒面以外に手作りする理由として選択された語は、「味が濃いし、防腐剤とか何かしら長持ちさせるものが入ってるじゃないですか。体に悪いような気がして」(派遣社員Lさん)など、味つけ、健康への影響、値段に関わるものであった。

これに関連して、非正規パート、専業主婦の女性の半数は、食事の用意で最も重視することとして、「栄養」バランスがよいことや「野菜」が多いことをあげた。彼女たちは正規フルタイムで働く女性たちよりも時間的に余裕があり、実際に手間をかけて食事を手作りしていた。正規フルタイムの女性よりも、品数が多く調理済食品が少ない食卓の様子が観察された。

他方、「手作り＝愛情」を否定する女性には、正規で働く者が多かった(正規6名、非正規1名、表1)。例をあげると、大手保育所チェーンで事務をするGさんは保育園のお迎えの後、18時20分に帰宅し20～30分ぐらいで夕食を作る。時間がないので「凝った料理はできない」といい、「もう惣菜を買って来て、夕飯にそれみたいな日も全然あるけど、それが愛情と結びついてるとは思わなくて、どう食事の時間を過ごすか」と話した。Kさんの話のように、正規で働く女性たちからは帰宅後、食事の用意に長い時間をかけることができない様子が聞かれた。

職業に関しては、松信(2000)の研究で指摘されていたように、看護師や福祉士

など「準専門職」の女性たちから「手作り＝愛情」を否定する話がよく聞かれた(表1を参照)。たとえば、看護師として保育所に勤務するBさんは、「今はやっぱり時代の流れですね。育児ノイローゼとかお母さんが1人で抱え込んでから、レトルトとかそういうのをうまく使ってという指導に移行してますね」と職務上の経験から調理済食品の意義について語った。Bさん自身は2人の幼児を育てており、毎日17時20分に帰宅し食事の用意をする。常に時間がないので家事より子どもと過ごす時間を優先しているという。

働いてなかったら食育とかって思うんですけど、……うちはとにかく上の子が活発で、料理するぐらいだったら外で一緒に遊んでほしいタイプなんで。だから料理とか家事の時間を少なくして、子どもと遊びに行く方にウエート置いてる。

さらに、病院で看護師として働きながら2人の幼児を育てているFさんは、栄養面を考慮しても、離乳食は手作りしなくてかまわないと話した。

離乳食とか見ると、出来合いのものも結構あるじゃないですかレトルトで。あれも野菜とかたくさん入ってたりとか、日頃とれないレバーとかが入ってたりするんで、使いようによっては全然いい。

看護師や福祉士の女性たちには、専門学校や職場で栄養や育児について学んだ経験を通して手作り規範を批判的に捉える様子が観察された。よって、職業に関わる第2次社会化が意識に影響を与えている可能性があるだろう。

4.2.2 階層・世帯で異なる対処戦略

以上のように、とくに就業形態、職業によって、食事の用意の意味づけに関して特定のパターンがみられた。だが、「手作り＝愛情」という考え方を批判していた女性たちも、実際には、労働時間と手作り規範の板挟みに葛藤しながら、食事の用意をしていた。世帯収入が高い者は、刺身や寿司など健康的で高価な惣菜もときおり購入しつつ、経済的資源を生かしてできるだけ手作りする戦略を採っていた。たとえば、病院で働く医療系専門職のAさんは大企業に勤務する夫と2人の子どもを育てている。食材の定期宅配サービスを利用するようになったことで、「もう食料品はもうほとんど宅配だし、夫はやらないけど負担は軽くなった」と話したように、買い物に行く回数を減らした。Aさんは産地にこだわるため買い物に行くとき味する時間がかかるが、利用しているサービスは主に国産の食材や調理済食品を配達する。「それなりの基準をもってやってるので、あんまり何も考えずにとることができるかなって」といい、時間と安心安全を購入していた。

看護師Bさんの場合、システムエンジニアとして働く夫の帰宅時間は23時を過ぎるため、平日は家事育児をほぼひとりで行っている。「手作り＝愛情」には否定的

だが、5万円ほどの調理家電を複数購入し、「ホットクックをフル活用しています。すごい便利で生活が変わりました。自由になる時間が増えました」と話した。平日の時間不足に関して、外部化よりも、手作りにかかる時間の削減によって解決しようと試みている。

このような世帯収入が高い者と比較して、世帯収入が低い者は、サービスや家電を購入するよりも、比較的安価で便利な食品を利用することで時間不足を解決しようとしていた。社会福祉士としてパートで働くIさんの場合、世帯収入が低く、夫は週末も仕事で不在がちである。Iさんは2人の子どもの世話で家事にかかる時間がとれず、「手作りするより一緒に食べる時間の方が大事」と話した。それでも、栄養バランスを考えつつ食事の用意をしており、朝夕食時に菓子やスナックを少しずつ皿に盛り付けて出していることについて、次のように語った。

これは昆布とさけるチーズですね。これも品数増やすためですね。子どもはとくに希望してないんですけど、量より品数が多い方がいいっていうのは昔聞いてそれをずっとやってるだけですね。ちょっとずついるんなものと思って。大人はないですね。

この話のように、Iさんは子どもの栄養のためになるべく品数を増やすよう努めていた。また朝食の際、子どもには気を配って絵皿を使うが、「大人の分の食パンはティッシュの上に乗せて、終わったらティッシュ捨てるだけ」と少しでも皿洗いかかる時間を減らそうとしていた。

さらに、ひとり親世帯はいつそう時間不足の状況にあった。会社員Tさんの場合、正規雇用で一般事務をしており、都心にある会社までの通勤時間が長い。17時半に帰宅して、6歳の子どもの1日の様子を聞いたり洗濯したりしながら食事の用意をし、18時に2人で夕食を食べる。Tさんはすべての家事育児をひとりでするため時間がなく、夕食に安価な調理済食品を活用している。だが抵抗感は消えず次のように話した。

私の母、専業主婦だったんで帰ってくるとご飯の香りがして、テーブルの上は全部手作りのものっていう感じで育ったので、そうしなきゃいけないっていうのがあるんですよ。ただ実際時間もないし、そう得意でもないし、お惣菜とか外食頼ってるけど、やっぱり罪悪感はずごくある。……出すときに「今日もお惣菜でごめんね」「今日も適当に作っちゃってごめんね」とかから始まる。

もう一例あげると、会社員のSさんは正規で事務の仕事をしなが、ひとりでもう一人を育てている。保育園へのお迎えの後、20時に帰宅し夕食の用意をする。子どもは保育園で補食をとっているので夕飯は軽めにしている。手作りと愛情に関しては、「まったく関わってないと思います。要は自己満だとは思んですけど親の」

と愛情との結びつきを批判的に捉えていた。Sさん自身が食事の用意で最も重視することに関して、次のように話した。

好きなものは何かな、それだけです（笑）。あとはいかに自分が簡単に作れるやつかっていう。スライスチーズだったらそのまま出せばいいとか、……とりあえず白米とかそれだけ食べさせればよかったのもあったので、嫌いなのかはもう出さずに、それだけ与えておなかいっぱいになるまで。

Sさんの話のように、正規雇用で働く女性の約半数は、調理時間だけでなく食事時間も節約しようと、献立に「子どもが食べてくれるもの」を最も重視すると話した。子どもが好き嫌いで食べないと食事の介助に時間がかかるためであり、一種の「時間節約術」だといえる。時間的により余裕のある非正規パート、専業主婦の女性の半数が最も重視することとして「栄養バランス」をあげたのとは対照的であった。そうであっても、SさんとTさんは時間がない中、子どもの栄養に気を配り、バナナやブチトマト、納豆を活用するなどして、ほぼ毎日野菜や果物を用意して子どもに食べさせていた。

要するに、就業している女性たちは労働時間と手作り規範の板挟みで葛藤しつつ、世帯収入が高ければ健康的な調理済食品を購入したり、食材宅配サービスや調理家電によって時間を節約して手作りしたりしていた。他方、世帯収入が低い者はそういった手段は採れず、安価な調理済食品や手軽に食べられ栄養がありそうな食材を活用していた。Allisonが指摘する「欧米にはみられない」「手の込んだ」食事を手作りしなければならないという規範の下、階層によって異なる戦略が採られていた。

4.3 考 察

以上の調査結果について考察する。4.1で示したように、夫と同居する女性たちには、食事の用意においても「子ども中心主義」がみられた。これには就業形態、職業、学歴、世帯収入による違いはなかった。また、食事作りは母親の役割という意味づけが最も頻繁に聞かれた。よって、欧米の先行研究が指摘した「妻役割」というよりも、「母親役割」の意味合いが強いと見える。食事の用意においても、先述の吉田（吉田編 2018: 2）が論じたように、子ども中心主義が女性たちを母親役割へと促していたのである。

したがって、本調査の女性たちにとって「手作り規範」の意味とは、母親は子どものために愛情を込めて食事を手作りするべきだ、ということになる。これに対する態度に関して、4.2で示した通り、就業形態、職業、学歴、世帯収入によって異なるパターンがみられた。

就業形態については、非正規雇用の女性には手作り規範を肯定的に捉える傾向がみられた。彼女たちは家事育児に差し支えない時間内で母親役割の延長として家計補助のために働く傾向があり（藤田・額賀 2021）、母親役割とみなす食事の用意を

簡易化・外部化することには抵抗があると考えられる。その一方で、正規フルタイムの女性には手作り規範に批判的な事例が複数みられた。とくに労働時間の影響を受ける平日の夕食作りでは、仕事と両立するために、簡易化・外部化の戦略を採る様子がみられた。よって、手作り規範への態度は、母親役割の延長として非正規で働くのか、より仕事へのコミットメントを有して正規で働くのかに関わっているといえる。

また、職業に関して、「準専門職」の方が「専門職」よりも外部化への抵抗感が少ないという説（松信 2000）に対して、これを支持するような事例がみられた。「両立しやすい職場環境」がその要因とされていたが、本調査では看護師や福祉士の語りから、「準専門職」の職業や学校を通した第2次社会化もその意識の傾向に影響を与える可能性が示唆された。

学歴に関しては、手作り規範の相対化と直接的な関連はみられなかった。この「準専門職」の女性たちは専門学校を卒業していた。しかし、本調査の大卒の専業主婦たちは手作りを重視しており、先述の中西（2018）の調査と似た傾向（専業主婦であるほど、高卒以下ではないほど、性別役割分業を肯定するほど、有意に子どもの食べるものに注意する）を示した。したがって、単に学歴が高いほど手作り規範に否定的というわけではないといえる。学歴は職業との関わりを通して影響を与える可能性があるだろう。

世帯収入については、手作り規範への態度に関する特定の傾向は見出されなかったが、対処戦略には特徴的なパターンがみられた。具体的には、世帯収入が高い者は高価な調理済食品、サービスや家電を購入して時間を節約していた。他方、世帯収入が低い者はそういった手段を採っていなかった。

以上のことから、正規雇用で労働時間が長く、また教育機関や職場などで専門的な知識や経験を得ている女性の方が、手作り規範を相対化しやすいことが示唆される。さらに、先行研究は、妻の労働時間や収入割合が多いと夫が家事参加する傾向を指摘している（松田 2006）。よって、とくに共働きの女性は、正規雇用での就業継続を通して経済力を得ることで、部分的な外部化という対処戦略が可能になるだけでなく、夫との分担をより志向するようになる可能性が示唆される。

しかし、新自由主義的な女性活躍推進は女性の階層化を伴うと指摘されている（三浦 2015）。上記のような比較的階層が高い共働きのキャリア女性の間では手作り規範が弱まり、部分的な外部化や分担によって負担が軽減されるかもしれない。だが、先述の通り、非正規パートや専業主婦の女性には手作り規範を相対化しにくい傾向が示された。また、ひとり親世帯の場合、経済的に外部化が難しい、あるいは日常的に分担やサポートをしてくれる者がいない状況であれば対処戦略も限られる。そうであれば、これらの女性の間では食事の用意の負担は軽減されにくく、DeVault（1991）が指摘する「女性の抑圧」が大きいままとなる可能性があるだろう。

5 結 論

結論として、第1の問い「育児期に就業している女性は、食事の用意にどのような役割を見出しているのか」に関しては、DeVault (1991)ら欧米の先行研究が示した夫婦関係・妻役割重視という説と異なり、本調査の女性たちは「子ども中心主義」から食事の用意に母親役割を見出していることが明らかになった。第2の問い「手作り規範への態度は、就業形態、職業、学歴、世帯収入によって女性の間でどのような差異がみられるのか」に関しては、就業形態や職業との関わりがみられた。つまり、母親役割の延長として働く非正規女性は手作り規範に肯定的な傾向がみられる一方で、正規フルタイムや準専門職の女性には批判的に捉える事例が複数みられた。また、その対処戦略に関して、世帯収入によって異なるパターンがみられた。要するに、手作り規範の相対化にも、その対処戦略にも階層差が見出されたのである。

本研究の限界として、事例数は母集団内の数の上では少なく一般化はできない。結果のさらなる検証が必要である。また、調査地域を首都圏に限定したため、他の地域では異なる状況が浮かび上がる可能性がある。以上は今後の課題としたい。

[注]

- 1) この方法の短所として、(1) 内部者であるがゆえに語ってもらえない点がある、(2) ネイティブの中にも差異があるのに、相手のことをよくわかっていると思込むことなどが指摘されている (照山 2013)。本調査でも、一部の層には親しみを抱きにくい大学教員という調査者の職業により語ってもらえなかった点があると考えられる。また、調査者自身と調査協力者の間に階層差がある場合、調査協力者の生活の文脈を十分理解できていない部分もあるだろう。対応策として、調査者2人は自らの影響について話し合い批判的に検討しながら調査を進めた。
- 2) 本調査ではGTAを応用したデータ分析法 (佐藤 2006: 184) を採用した。

[文献]

- Allison, A., 1991, "Japanese Mothers and Obentos," *Anthropological Quarterly* 64(4): 195-208.
- Beagan, B., G. E. Chapman, A. D'Sylva and B. R. Bassett, 2008, " 'It's Just Easier for Me to Do It' : Rationalizing the Family Division of Foodwork," *Sociology*, 42(4): 653-71.
- Charles, N. and M. Kerr, 1988, *Woman, Food, and Families*, Manchester: Manchester University Press.
- DeVault, M. L., 1991, *Feeding the Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work*, Chicago: University of Chicago Press.
- 江原由美子, 1988, 「料理番組から見る『主婦』の戦後史」飯田深雪・江原由美子・土井勝・長山節子『NHK「きょうの料理」きのう・あす——食卓が変わる女性が変わる家族が変わる』有斐閣, 143-78.
- Erickson, K., and D. Stull, 1997, *Doing Team Ethnography*, Thousand Oaks, CA: Sage
- 藤田結子・額賀美紗子, 2021, 「働く母親と有償労働の意味——非大卒女性の稼ぎ手役割と職業役割をめぐる意識」『家族社会学研究』33(1): 7-20.

- 福島智子, 2020, 「『家庭料理』規範の検討——社会学的分析の深化に向けて」『松本大学研究紀要』18: 81-9.
- 平山亮, 2017, 『介護する息子たち——男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房.
- Holm, L., M. Ekstrom, S. Hach and T. Lund, 2016, "Who is Cooking Dinner?: Changes in the Gendering of Cooking from 1997 to 2012 in Four Nordic Countries," *Food, Culture and Society*, 18: 589-610.
- 堀内かおる・天野寛子・伊藤純, 1997, 「家事労働観と生活時間から見る夫妻のジェンダー関係——1995年世田谷区在住雇用労働者夫妻の調査から」『日本家政学会誌』48(10): 851-64.
- 石田貴士・西山未真・丸山敦史, 2015, 「女性の就業形態が食生活に与える影響」『食と緑の科学』69: 17-23.
- 伊藤純・伊藤セツ, 1996, 「食生活家事労働の数量的把握からみた食とジェンダー」昭和女子大学近代文化研究所『学苑』680: 1-15.
- Jones, D., 1970, "Towards a Native Anthropology," *Human Organization*, 29: 251-9.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2017, 『現代日本の結婚と出産——第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書』(2021年7月1日取得, http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf)
- 小山静子, 1999, 『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房.
- 松田茂樹, 2006, 「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『家計経済研究』71: 45-54.
- 松信ひろみ, 2000, 「就業女性にとっての職業と子育て」目黒依子・矢澤澄子編『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社, 149-68.
- 三浦まり, 2015, 「新自由主義的母性——『女性の活躍』政策の矛盾」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』18: 53-68.
- 村瀬敬子, 2009, 「『主婦の友』にみる台所と女性」高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する——歴史・ジェンダー・ナショナルリティ』世界思想社, 80-107.
- , 2020, 「文化仲介者としての料理研究家・江上トミ——家庭料理の手づくり規範をめぐる」『社会学部論集』71: 47-66.
- 内閣府, 2020, 『男女共同参画白書 令和2年版』.
- 中西祐子, 2018, 「誰が子どもの食に配慮するのか?」石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子『子育て世代のソーシャル・キャピタル』有信堂高文社, 157-78.
- 野田潤, 2015, 「家族への愛情は弁当からか」品田知美編『平成の家族と食』晶文社, 118-25.
- 佐藤郁哉, 2006, 『定性データ分析入門——QDAソフトウェア・マニュアル』新曜社.
- 品田知美, 2007, 『家事と家族の日常生活——主婦はなぜ暇にならなかったのか』学文社.
- Smith, Lindsey P., Shu Wen Ng & Barry M. Popkin, 2013, "Trends in US Home Food Preparation and Consumption: Analysis of National Nutrition Surveys and Time Use Studies from 1965-1966 to 2007-2008," *Nutrition Journal*, 12(1): 45.
- 照山絢子, 2013, 「ネイティブ・エスノグラフィー」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, 68-73.
- 山尾美香, 2003, 「料理番組と『愛情』の政治学」『思想』956: 143-53.
- 大和礼子, 1995, 「性別役割分業意識の二つの次元」『ソシオロジ』40(1): 109-26.
- 矢野敬一, 2007, 『『家庭の味』の戦後民俗誌——主婦と団練の時代』青弓社.
- 吉田直哉編, 2018, 『保育原理の新基準(再訂版)』三恵社.

(原稿受付 2021.3.20 掲載決定 2021.7.29)

Rationalizing Foodwork at Home:
A Qualitative Study of Coping Strategies and Social Stratification
among Working Women with Children

FUJITA, Yuiko / NUKAGA, Misako
Meiji University / University of Tokyo

yfujita@meiji.ac.jp / nukaga@p.u-tokyo.ac.jp

This study examines the meaning of foodwork performed by working women with children, in the context of increased participation of women in the workforce and stratification between career and non-career women, focusing on the “norms of home cooking.” The main research questions are: (i) How do working women with children rationalize their role in foodwork at home? (ii) How do factors such as work hours/employment, occupation, education, and household income influence their perception of the “norms of home cooking?” We collected data using interviews, observations, and photos of family meals taken by the respondents.

The results showed that most respondents considered their children most important while feeding the family. They tended to explicitly classify foodwork as a “mother’s role,” which highlights a gendered division of labor. We observed “child-centeredness” in these women’s thoughts and foodwork.

Second, the perception of the “norms of home cooking” was related to work hours/employment and occupation. Respondents who worked part-time to support household income and considered it a part of the mother’s role positively perceived the connection between “home cooking and love.” However, respondents who worked full-time with regular employment and/or as care workers were critical of the connection. Moreover, we observed that coping strategies for foodwork differed depending on household income. Those with higher household income tended to purchase services and healthy finished products to save time.

Therefore, we observed that “norms of home cooking” may diminish further among career women as social stratification increases due to the “promotion of active participation of women” in the workforce. However, foodwork continues to contribute to the oppression of those women who work part-time and/or are a single parent.

Key words: foodwork, gender division of labor, home cooking

(Received Mar. 20, 2021 / Accepted July. 29, 2021)